

ランチョンセミナー：10月4日(金) 12:00~12:50 (セミナー 1~6)
：10月5日(土) 12:00~12:50 (セミナー 7~16)
：10月6日(日) 12:00~12:50 (セミナー17~20)

■ランチョンセミナー1：あらゆる社会をデジタルトランスフォーメーションするために

The Latest Technologies for Digital Transformation

演者1：西脇 資哲 (日本マイクロソフト株式会社)

Nishiwaki Motoaki (Microsoft Japan)

演者2：栗山 裕之 (アボットジャパン合同会社)

Hiroyuki Kuriyama (Abbott Japan LLC)

座長：飛田 征男 (福井大学医学部附属病院 検査部)

世界中で、急速に加速しているデジタルトランスフォーメーション(DX)ですが、日本は海外と比べ遅れているという指摘を受けており、検査業界においてもDXに取り組みなければ、労働人口の減少や多様化する患者ニーズなどに対応できず、危機的な未来に直面しかねません。

本講演では、IoT、ビッグデータ、クラウドサービス、デジタル化、AI など、DXを支える最新テクノロジーに焦点を当てます。IoTの利用例やビッグデータの収集と分析による影響およびメリット、特に生成AI技術の進展とその社会への応用を紹介します。これらの技術が業務や生活にどのように影響をあたえ、未来の医療業界・検査業界のビジョンを形作るかを解説します。

共催：アボットジャパン合同会社

Abbott Japan LLC

■ランチョンセミナー2：インフルエンザ診断における核酸検査の有用性

Utility of nucleic acid testing in diagnosing influenza

演者：賀来 敬仁 (長崎大学病院 臨床検査科)

Norihito Kaku (Department of Laboratory Medicine, Nagasaki University Hospital)

座長：柳原 克紀 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 病態解析・診断学分野)

インフルエンザウイルス感染症は、治療薬が存在する数少ないウイルス性呼吸器感染症である。診断で最も用いられるのは抗原検査であるが、発症初期の感度が低い。そのため、抗原検査で陰性であっても流行状況を考慮してインフルエンザと臨床診断して治療を行う場合がある。しかし、インフルエンザの検査で陽性となることを欠席の要件として求める学校や職場も存在し、連日受診する患者もいる。また、COVID-19パンデミック以降、流行期が変化し診断が難しくなっている。そのため、核酸検出検査の重要性が増してきている。本講演では、医師の立場から核酸検出検査の有用性について述べる。

共催：杏林製薬株式会社

KYORIN Pharmaceutical Co., Ltd.

■ランチョンセミナー3：激甚災害に備える！災害拠点病院検査部の取り組み

Preparing for Major Disasters! Initiatives of the Clinical Laboratory Department.

演 者：新田 誠（福岡県済生会二日市病院 検査部）

Nitta Makoto (Saiseikai Futsukaichi Hospital, Laboratory Department)

座 長：田上 圭二（済生会熊本病院 中央検査部）

Keiji Tanoue (Saiseikai kumamoto Hospital, Central Laboratory Department)

当院は筑紫医療圏で唯一の公的病院で、二次救急医療施設および災害拠点病院として、医療水準の向上やチーム医療の提供に注力しています。本講演では、災害拠点病院としての検査部の取り組みを紹介します。東日本大震災の経験から、検査の継続性、迅速性、正確性の重要性を認識し、BCP（事業継続計画）整備や訓練を実施しています。2016年の寒波では、断水状態でも生化学部門の機器を活用して通常の検査報告を維持しました。さらに、2017年には新たな検査機器を導入し、災害対策を強化しています。本講演では、これらの取組を通じて、災害に強い検査室の実現を目指す方法と、今後の地域や関連機関との協力の展望についてお話しします。

共催：オーソ・クリニカル・ダイアグノスティクス株式会社
Ortho-Clinical Diagnostics K.K.

■ランチョンセミナー4：1. 持続可能で質の高い医療提供に向けて 検体検査の業務効率化と安心
安全な検査体制を構築する新しいオートメーションシステム
Atellica i-Auto 導入効果

2. 当院での検体搬送システム Aptio Automation の新規導入による検査
業務の更なる効率化

1. Benefit of introducing Atellica i-Auto, a new automation system that improves the efficiency of sample testing and builds a safe and secure testing system for sustainable and high-quality medical care
2. Benefit of Introducing Aptio Automation, a sample transportation system, to further improve the efficiency of testing operations.

演者1：吉廣 一寿（JA 尾道総合病院 臨床研究検査科）

Kazutoshi Yoshihiro (JA Onomichi Hospital -Clinical Research Laboratory)

演者2：梶 良太（東京医科大学八王子医療センター 中央検査部）

Ryota Kaji (Tokyo Medical University Medical Center -Central Laboratory)

座 長：古谷弘一（東京医科大学病院 中央検査部）

臨床検査を取り巻く環境は医師の働き方改革を含む様々な要因で変化しています。検体検査業務では医療の質を維持しながら、業務の効率化を実現し、タスクシフト/シェアを推進する必要があります。

今回のセミナーでは更なる検体検査業務の効率化を実現すべく、自動閉栓装置付きの免疫生化学統合装置「Atellica i-Auto」を導入したJA 尾道総合病院様と免疫生化学統合装置「Atellica Solution」、検体搬送処理システム

「Aptio Automation」及び検査工程を一元管理するシステム「Atellica Process Manager」を導入した東京医科大学八王子医療センター様に導入効果を含めた有用性に関する紹介を予定しています。

共催：シーメンスヘルスケア・ダイアグノスティクス株式会社
Siemens Healthcare Diagnostics K.K.

■ランチョンセミナー5：散乱光分析はプロカルシトニンの感度をどこまで上げることができるか？

演 者：大山 健斗（日本大学医学部附属板橋病院 臨床検査部）

Ooyama Kento (Department of Clinical Laboratory, Nihon University Itabashi Hospital)

座 長：脇田 満（順天堂大学医学部附属順天堂医院 臨床検査部）

準備中

共催：株式会社カインス
KAINOS Laboratories, Inc.

■ランチョンセミナー6：前立腺癌診断におけるプロステートヘルスインデックス (*phi*) の臨床的有用性と更なる可能性

Clinical utility and perspectives on the Prostate Health Index (*phi*) in prostate cancer diagnosis

演 者：伊藤 一人（医療法人社団美心会 黒沢病院）

Kazuto Itoh (Kurosawa Hospital)

座 長：大塚 文男（岡山大学 総合内科学）

PSA 検査異常者に対し、診断精度を維持し不必要な生検を減らす診断フローの確立が重要な臨床課題だが、バイオマーカーでは[-2]proPSA を組み入れたプロステートヘルスインデックス (*phi*) が注目されていた。日本の前向き国内多施設共同研究 PROPHET で、*phi* は癌と非癌の鑑別に加え、臨床的に重要な高悪性度癌の鑑別能において優れていることが証明され、2021 年 11 月に保険収載され、実際に当院では生検数を 3 割強減少させつつ、正確な癌診断が可能になっている。また将来展望として、再生検時の *phi* 動態の意義、監視療法、フォーカルセラピー、放射線治療後の再発モニタリングマーカーの可能性についても紹介する。

共催：ベックマン・コールター株式会社
Beckman Coulter K.K.

■ランチョンセミナー7：1. ルミパルスプレスト® iTACT® シクロスポリン」の試薬性能と前処理技術

2. ルミパルスプレスト® iTACT® タクロリムス」導入による検査室運営

の改善効果

1. Analytical performance and automated pre-treatment technology of the “Lumipulse® Presto® iTACT® Cyclosporine” assay
2. Improvement of laboratory management effectiveness through the adoption of the “Lumipulse® Presto® iTACT® Tacrolimus” assay

演者1：小原 碧（国家公務員共済組合連合会虎の門病院 臨床検体検査部）

Midori Obara（Department of Central Laboratory, Toranomom Hospital）

演者2：戸来 孝（国家公務員共済組合連合会虎の門病院 臨床検体検査部）

Takashi Herai（Department of Central Laboratory, Toranomom Hospital）

座長：内田 一弘（北里大学病院 臨床検査部）

今回のランチョンセミナーは、虎の門病院 臨床検体検査部 小原碧先生、戸来孝先生にご講演をお願いしております。

前半は、本年2月に発売となりました全血検体の自動前処理を可能とした「ルミパルスプレスト iTACT シクロsporin」の性能評価のご紹介、後半は同じく全血検体の自動前処理を行う試薬である「ルミパルスプレスト iTACT タクロリムス」を導入したことによる検査室の運用改善効果、および導入時のポイントをご紹介して頂く予定です。

共催：富士レビオ株式会社
FUJIREBIO INC.

■ランチョンセミナー8：誰でもわかる！医療DX2030で検査室に求められること

Everyone can understand! What is required in the clinical laboratory for Healthcare DX 2030 in Japan

演者：堀田 多恵子（九州大学病院 検査部）

Taeko Hotta（Clinical Laboratory, Kyushu University Hospital）

座長：松下 一之（千葉大学医学部附属病院 検査部・臨床検査科（兼）遺伝子診療部 / がんゲノムセンター / 超音波センター）

世界的に見て医療DXは急速に進展している。日本においても、現在の電子カルテは医療機関によって違いがあるため、電子カルテ情報および交換方式などを標準化する動きがある。具体的には、医療現場での有用性を考慮し、医療情報の3文書6情報から標準化するとされている。6情報のうち感染症情報と検査情報は正に臨床検査値であり、JLACコードを用いることで閲覧可能とすることができる。

電子カルテ情報の標準化は検査室にとって重要な課題であり、喫緊に求められているのは、わずか43項目+5感染症項目である。手始めにJLAC10/11の準備を試みてはどうだろうか。本セミナーでは、『誰でもわかるJLAC』とそのために検査室で準備することをともに考えたい。

共催：株式会社エイアンドティー
A&T Corporation

■ランチョンセミナー9：現状維持でホントに良いですか？

～ 患者に貢献できる検査室への組織変革 ～

Are you sure you want to maintain the status?

Organizational change into a clinical laboratory that contributes to patients

演 者：今枝 義博（社会福祉法人聖霊会 聖霊病院 臨床検査技術科）

Yoshihiro Imaeda（Holy Spirit Hospital Department of Clinical Laboratory）

座 長：櫛引 健一（関西医療大学 保健医療学部 臨床検査学科）

当院は1945年に聖霊診療所として開院し、現在は病床数198床、1日平均外来患者数291.4人、平均在院日数12.3日です。また、高齢者急性期、周産期、緩和ケア、病診連携推進の4機能を有し地域多機能ハブ病院として地域の医療を担っております。

私は大学病院の臨床検査部で技師長、病理部では副部長を経験し、2022年8月に当院臨床検査技術科の技師長として転職しました。着任時、検査室は人員不足であったため、スタッフに教示を受け、私も検査業務や当直業務を実施しました。実際に業務をしたことにより様々な問題が明確化されました。そこで、次のような8つのアプローチで検査室の組織変革に取り組みました。①変革の緊急性・必要性の理解、②強い変革推進チームの結成、③変革ビジョンの明確化、④ビジョンの周知・共有、⑤活動しやすい環境整備、⑥短期目標の設定・成果、⑦さらなる変革の推進、⑧新しいプロセスの定着です。

見えてきた課題とは人員不足、業務効率が悪い、老朽化機器の更新が出来ない、モチベーションが低いなど多々ありましたが、実は問題の核心・本質は病院の一部門として患者に対する貢献度が低過ぎる事だと気がきました。よって、新検査室の『あるべき姿』は患者に貢献できる検査室だと確信しました。まず、短期目標を検査システム及び機器の更新とし、その過程で業務改善・協力体制を構築する事としました。時系列的には12月までにアプローチ①～⑥が進み、翌年1月に病院幹部会で提案し決裁されました。その後、変革推進チームを発足し、チームが中心となって各スタッフが発言しやすい雰囲気を作り議論が活性化する事により、その結果、スタッフが自主的に活動し始め、協力し合うようになり、7月末に短期目標を達成する事ができました。当日は病院幹部会へ提案した手法・観点、各アプローチの詳細、その後の状況を説明します。参考にして頂けると幸いです。

共催：株式会社日立ハイテク

Hitachi High-Tech Corporation

■ランチョンセミナー10：日本の少子化対策の一助として 不妊治療時の検査

～妊活ドックから体外受精・胚移植まで～

Will it be one way to stop the declining birthrate?

Infertility test ; Preconception dock～IVF-ET

演 者：山崎 裕行（加藤レディースクリニック）

Hiroyuki Yamasaki（KATO LADIES CLINIC）

座 長：谷 浩也（愛知医科大学病院 中央臨床検査部）

日本では急激に少子化が進んでいる。国の少子化対策の一つとして不妊治療の保険適応が2022年4月から開始とな

った。2021年の出生数約81万人、うち生殖補助医療(ART)による出生数は約7万人で11人に1人の割合であった。

生殖適齢期は個々の女性にとっても社会的活動期であり、妊娠希望であっても妊活や不妊治療を制限されることも多々ある。

今回、不妊治療が公的保険となった背景とともに、妊娠を希望する人たちへの方策としての①妊活ドック②タイミング③人工授精④体外受精・胚移植について解説し、そこで必要とされる検査と意義について、不妊治療・特に体外受精に特化した当院の立場から紹介する。

共催：東ソー株式会社
TOSOH CORPORATION

■ランチョンセミナー11：POCTの質保証を実践するためには？－ISO 15189；2022への対応と臨床サービス－

How to practice POCT quality management?

-ISO 15189:2022 and clinical services-

演 者：山下 計太 (浜松医科大学医学部附属病院 検査部)

Yamashita Keita (Department of Laboratory Medicine, Hamamatsu University School of Medicine)

座 長：前川 真人 (浜松医科大学 医学部)

2018年の医療法改正とISO 15189 (臨床検査室—品質と能力に関する要求事項)の改版(第4版)など、検査室外のPOCTの管理、精度保証をどのようにしていくべきか、検査室の今の課題となっている。

その解決策のひとつとして、POCT委員会のような病院組織で活動していくことが前提となる。POCTは、まさにチーム医療そのものである。

本セミナーでは、POCTに対して、現場の技師が今からできることや、管理者に求められることなど、我々が経験した事例から、POCTの質保証を実践するためのヒントが見つかりたい。

共催：シーメンスヘルスケア・ダイアグノスティクス株式会社
Siemens Healthcare Diagnostics K.K

■ランチョンセミナー12：敗血症診療におけるプロカルシトニンの位置付け

Significance of procalcitonin in sepsis treatment

演 者：射場 敏明 (順天堂大学大学院医学研究科 救急・災害医学)

IBA Toshiaki (Emergency and Disaster Medicine Juntendo University Graduate School of Medicine)

座 長：田部 陽子 (順天堂大学大学院医学研究科 臨床病態検査医学講座)

敗血症は2016年におけるSepsis-3提唱によって、「感染症に対する生体反応が調節不能な状態となった結果、重篤な臓器障害を引き起こされる状態」と再定義された。最近では敗血症をサブグループにタイプ分けし、タイプ別に異なる対応を行うことが必要であるという考え方も出てきており、その分類にバイオマーカーを用いようとする方向性も見て取ることができる。

評価については未だ十分に高いとは言えないプロカルシトニンであるが、その特性を理解することによって日常診療に役立てられることも期待できるので、十分な理解が必要である。

共催：積水メディカル株式会社
SEKISUI MEDICAL CO., LTD.

■ランチョンセミナー13：HCV Duo (抗原/抗体同時スクリーニング)が変える患者へのアプローチ
～新たなHCV陽性者の拾い上げシステムの構築～

Approach to Patients Transformed by HCV Duo (Antigen/Antibody screening testing)

～Establishing a New System for Identifying Newly Diagnosed HCV-Positive Individuals～

演 者：田中 靖人 (熊本大学大学院生命科学研究部 消化器内科学講座/中央検査部)

Yasuhito Tanaka (Department of Gastroenterology and Hepatology, Faculty of Life Sciences, Kumamoto University)

座 長：村上 正巳 (国際医療福祉大学/群馬大学)

肝炎ウイルスの撲滅は世界的な課題であり、日本でも早期発見と治療の重要性がますます高まっています。しかし、現在の課題の一つは、多くの感染者が無症状であり、またHCV抗体検査の結果が既往感染かキャリアかを判断できないことです。そのため、HCV RNA (PCR法)検査による確定診断が必要とされます。このような事情から、HCV抗体スクリーニングが陽性であっても、治療に繋がらないケースが散見されます。

エクルーシス試薬HCV Duoは、従来の抗体検査に加えてコア抗原を同時に検査するスクリーニング試薬です。これにより、患者へのアプローチの改善やHCV(現)感染患者の早期発見と治療への連携強化に貢献し、現状を大きく変える可能性が期待されています。また、今回のセミナーでは、熊本県での肝炎拾い上げプロジェクトの取り組みも紹介しながら、臨床検査技師が肝炎ウイルス陽性者の拾い上げ活動にどのように関わらなければならないかについてもお話する予定です。

共催：ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社
Roche Diagnostics K.K.

■ランチョンセミナー14：PCTガイド下抗菌薬治療は抗菌薬適正使用の切り札になりえるか？
～PCTガイド下抗菌薬治療の過去・現在・未来～

Can PCT-guided antibiotic therapy be a trump card for appropriate use of antibiotics?

～Past, present and future of PCT-guided antibiotic therapy～

演 者：伊藤 明広 (公益財団法人大原記念倉敷中央医療機構 倉敷中央病院 呼吸器内科)

Akihiro Ito (Department of Respiratory Medicine, Ohara Healthcare Foundation, Kurashiki Central Hospital)

座 長：志馬 伸朗 (広島大学病院 救急集中治療医学)

以前より、PCTガイド下抗菌薬治療による感染症治療が予後の悪化を認めることなく抗菌薬の削減につながったとす

る報告が多数みられているが、日本の医療事情に沿った内容にはなっていなかった。そこで2022年2月に日本の救急集中治療・呼吸器・感染症専門医が集まり、日本の医療事情に即したPCTガイド下抗菌薬治療のアルゴリズムの作成を開始し、同年12月日本コンセンサスとして論文化した(Ito A, Shime N, et al. Clin Chem Lab Med. 2022;61(3):407-11.)。2024年4月最新の成人肺炎診療ガイドライン2024が発刊されPCTを用いた肺炎診療について言及されており、本講演では日本における今後のPCTガイド下抗菌薬治療の展望も含め講演する予定である。

共催：ベックマン・コールター株式会社
Beckman Coulter K.K.

■ランチョンセミナー15：どうしてる？採血待合スペースの混雑緩和対策

～クラウド採血待合システム“Smart Lounge”の使用経験～

How to use “Smart Lounge” ～This system introduce to patients the management of the waiting time.～

演者1：河野 江利子（大阪医科薬科大学病院 中央検査部）

Kouno Eriko (Osaka Medical and Pharmaceutical University)

演者2：井口 健（大阪医科薬科大学 情報企画管理部）

Iguchi Ken (Osaka Medical and Pharmaceutical University)

座長：早田 峰子（久留米大学病院 臨床検査部）

Souda Mineko (Kurume University Hospital)

当院の外来採血患者数が増加傾向にあり、採血待合スペースの混雑状況が課題となっている。今回、テクノメディカ社のクラウド採血待合システム“Smart Lounge”導入の機会を得たので報告する。

患者は採血番号券の2次元コードを読み取ることで採血待合状況を確認できる。実証実験で外来採血患者を対象に調査したところ、アクセス数は混雑する曜日・時間帯に伸びる傾向があり、アンケートでは幅広い年齢層で利用され利用満足度も高く、約半数が別の場所で待機していることが分かった。また、CYTHEMISを利用し、情報セキュリティリスク拡大を防いでいる。

当システムは、採血待ち時間の有効活用および混雑緩和に繋がり、患者サービスに貢献できる結果だった。

共催：株式会社テクノメディカ
Techno Medica Co., Ltd

■ランチョンセミナー16：甲状腺機能検査のpitfal

Pitfall of thyroid function tests

演者：西原 永潤（医療法人 神甲会 隈病院 内科／診療支援本部）

Eijun Nishihara (Internal Medicine, Kuma Hospital)

座長：木村 孝穂（群馬大学大学院医学系研究科 臨床検査医学／群馬大学医学部
附属病院 検査部）

甲状腺機能異常をきたす疾患の診断および治療方針の決定には、微量なホルモンレベルを把握する必要がある。現在用いられている高感度免疫測定法は、試薬中の様々な抗体や標識物質によってシグナルが増強されている。一方で、

このような抗体や標識物質に対して、異好性抗体などの干渉物質が存在すると、非特異的反応が生じて検査値の異常をきたしてしまう。

甲状腺機能検査への干渉による異常値を呈した症例のうち、半数以上の症例は誤診や不適切な治療を受けている。このランチョンセミナーでは、甲状腺専門病院で非特異反応が疑われた症例に対する一連の検証作業を確認しながら、甲状腺機能評価の落とし穴にいち早く気づけることを目指したい。

共催：富士フイルム和光純薬株式会社
FUJIFILM Wako Pure Chemical Corporation

■ランチョンセミナー17：臨床検査の技術革新！

一滴の血液が、腎移植の薬物投与設計を可能にする

Technological Innovation for Clinical Testing ~One drop of Blood
Enables Optimal Immunosuppression for Kidney Transplant~

演 者：岩見 大基（自治医科大学 医学部腎泌尿器外科学講座 腎臓外科学部門）

Daiki Iwami (Division of Renal Surgery and Transplantation, Department of
Urology, Jichi Medical University)

座 長：高橋 聡（札幌医科大学 医学部感染制御・臨床検査医学講座）

臓器移植のうちもっとも件数の多いのは腎移植であり歴史も長い。移植腎生着率改善のための免疫抑制薬は過量投与で感染症、悪性腫瘍、糖尿病など代謝異常の、投与不足で拒絶反応のリスクとなるがその安全域は非常に狭く、TDM管理が2000年前後より行われてきた。複数回採血や時間的拘束など種々TDM管理の諸問題に対して、我々はTDMの普及を目的に、近年開発された簡便・低侵襲な微量採血管（MSW2™）とLC-MS/MSによる測定系を組み合わせた、単一微量血液からの濃度一括測定システムの導入を目指し、前臨床試験を行ってきた。本講演では臓器移植における新世代の薬物投与設計法についての考えを提案させていただきたい。

共催：株式会社島津製作所
Shimadzu Corporation

■ランチョンセミナー18：災害時に合わせた臨床検査の対応

Response to disasters from Laboratory Medicine

演 者：坂本 秀生（神戸常盤大学 保健科学部 医療検査学科）

Hideo Sakamoto (Department of Medical Technology, Faculty of Health
Sciences, Kobe Tokiwa University)

座 長：山田 俊幸（自治医科大学 臨床検査医学）

日本臨床検査医学会では「東日本大震災対策委員会」、「熊本地震対策委員会」をアドホック委員会として臨床検査支援へ対応し、その活動は日本臨床検査振興協議会の大規模災害対策委員会に引き継がれ、能登半島地震では早くから組織的に臨床検査支援が行われました。

臨床検査自動分析装置は大量の水が必要であり、阪神・淡路大震災当時から、水不要のドライケミストリーが有用であり、東日本大震災、熊本地震、能登半島地震でも活用されました。また、東日本大震災以降はPOCT対応分析装置

も災害対応で活用されています。

いずれの臨床検査支援にもかかわった演者の経験を元にし、本セミナーでは災害時に合わせた臨床検査の対応例を紹介しします。

共催：富士フイルム株式会社／富士フイルムメディカル株式会社
FUJIFILM Corporation／FUJIFILM Medical Corporation

■ランチョンセミナー19：1) スキャッタグラム解析で YLC 精度向上に挑む

2) スキャッタグラムとヒストグラムが示す道標 赤血球形態のパターン分析

- 1) Challenging the accuracy improvement of YLC by scattergram analysis
- 2) Possibility of Scattergram & Histogram Pattern analysis for RBC morphology

演者 1：金並 真吾（愛媛大学医学部附属病院 検査部）

KINNAMI SHINGO (Ehime University Hospital clinical laboratory)

演者 2：脇田 満（順天堂大学医学部附属順天堂医院 臨床検査部）

WAKITA MITSURU (Department of Clinical Laboratory, Juntendo University Hospital)

座 長：宿谷 賢一（順天堂大学 医療科学部 臨床検査学科）

第一部

UF-5000 は尿沈渣検査の省力化において重要な役割を果たしている。今回は、愛媛大学医学部附属病院検査部で実施した尿沈渣鏡検条件の設定方法について報告、あわせて UF-5000 測定結果から推定された YLC 偽陽性要因に関する考察を行う。

第二部

UF-5000 研究用情報である赤血球形態情報は、赤血球の大きさと多彩性のパラメータから 3 つに分類、鏡検法での赤血球形態判定を行うにあたり、有益な参考情報となる。今回は、スキャッタグラムとヒストグラム情報が赤血球の形態的変化をどのように捉えているのかを紹介、赤血球形態鑑別の新たな道標となる可能性について検証する。

全自動尿中有形成分分析装置 UF-5000

医療機器製造販売届出番号 28B1X10014000041

製造販売元 シスメックス株式会社

共催：シスメックス株式会社
SYSMEX CORPORATION

■ランチョンセミナー20：目からウロコ 検査室経営戦略

～事例から学ぶ検査室経営の常識と新たな戦略～

Eye-opening laboratory management strategy

～Common sense and new strategies of laboratory management
learned from case studies～

演 者：本間 裕一（横浜市立脳卒中・神経脊椎センター 検査部）

Honma Yuuichi (Yokohama Brain and Spine Center (Test department))

座 長：三浦 ひとみ（東京女子医科大学病院 中央検査部）

一般的な検査室のマネジメントについて学ぶ機会が多いと思いますが、検査室の実践的な経営や戦略的な考えは独学に頼ることが多く、各施設の長が手探りでマネジメントを行い、常に模索していることと思われます。そこで、病院検査室、行政での経験を基に、また医業経営コンサルタント側から見た、より実践的な検査室経営に関わる知識について次の5点について解説することで、今後の各検査部門運営に役立ち、考える一助になればと思います。

- 1 検査部門の収支と検査室の運営形態
- 2 企業連合方式（課金）の計算方法
- 3 機器の購入の考え方
- 4 職員の経営マインドの醸成
- 5 医療DX 令和ビジョン 2030 後の検査部門戦略

共催：ベックマン・コールター株式会社

Beckman Coulter K.K.